

道化の言葉

— *The Merchant of Venice* の Launcelot Gobbo と
The Winter's Tale のクラウンの場合 —

西野義彰

I

前回、宮廷道化（又は職業道化）の代表として *Twelfth Night* の Feste に焦点を絞り、道化の言葉について考察したが、¹ 本論では粗野で愚鈍ゆえに愉快的な笑いを誘う、教養のない田舎者という意味を多分に持った道化（＝クラウン）の代表として、*The Merchant of Venice* の Launcelot Gobbo と *The Winter's Tale* のクラウンに注目し、その言葉の特徴について考察してみたい。

The Merchant of Venice は1596年から98年にかけて、いわゆる Shakespeare の喜劇時代に書かれたもので、悪役でユダヤ人の金貸し Shylock でよく知られている。Launcelot は登場人物一覧で ‘a clown, servant to Shylock’² と紹介されているが、途中で彼の仕える主人が Shylock から Portia に求婚する Bassanio に交替する。それによって彼の言動に変化が生じるが、全体的に彼は道化として滑稽な言葉の誤用や機知と笑いに満ちた独特の言葉によって、脇役ながらユニークな存在となっている。彼の名前について少し触れておくと、現在では一般的に Launcelot Gobbo という名前が定着しているが、David Wiles は著書の中で、意外なことに第1クオート版やフォリオ版では彼の名前は一貫して Launcelot Jobbe であると述べていて、さらに ‘launcelet’ と ‘jobbe’ の意味を *OED* で確認し、結論として、彼の名前は「好色漢」と「大食漢」の両方を意味し、彼は悪徳（moral Vice）であり、彼と戯れる者を突くということを暗示していると述べている。³ このことは Launcelot という道化を考察する場合、念頭に置くべき重要な点になるかもしれない。

Launcelot が初めて登場するのは2幕2場のベニスにおいてである。ただ一人登場すると、主人のユダヤ人のもとを去るか否か、独白の形で自分の中の悪魔と良心の言葉の間で揺れる様子を滑稽に語る。彼の文体は道化として当然ながら散文であり、Portia への求愛にやってくる王侯貴族たちの格調高いブランク・ヴァースとは対照的である。ただ、散文とは言っても、Brian Vickers が言う

ように、この劇における散文の使用はこれまでで最も複雑になっていて、その理由は散文の話し手が Portia や Nerissa から様々な脇役に至るまで含まれているからである。⁴ 彼の場合、賢明な職業道化とは違って、滑稽な言葉の誤用、同じような意味の言葉の繰り返し、たわいない内容や表現への固執などが目立ち、愚の体現者として滑稽に振る舞う。彼はあれこれ迷ったあげく、Shylock は悪魔の化身であるし、良心の声は主人の元にとどませようとする残酷なものなので、悪魔の指示に従い逃げることにする。

Laun. ...certainly the Jew is the very devil incarnation⁵, and in my conscience, my conscience is but a kind of hard conscience, to offer to counsel me to stay with the Jew; the fiend gives the more friendly counsel: I will run fiend, my heels are at your commandment, I will run. (2.2.25-30)⁶

このあたりは「一種のサイコマキア」(Brian Vickers)で、道化がコミカルな魂の葛藤を見せることで、観客の笑いを誘う。また、彼が自分の中の良心と悪魔と生き生きした対話をすることで、一人舞台ながらこの場が劇的になっているといえる。

彼の年老いて目の不自由な父親がやってくると、Launcelot は傍白で次のように言う。

O heavens! this is my true-begotten father, who being more than sand-blind, high gravel-blind, knows me not,—I will try confusions with him. (33-35)

上の‘true-begotten’という言葉は「嫡出の」という意味で、本来息子に用いられるべき表現が父親に用いられていて、これも滑稽な言葉の誤用である。一方、‘gravel-blind’はおそらく‘sand-blind’（かすみ目の）という言葉をもじって作った言葉であり、‘try confusions’は‘try conclusions’（試してみる）のつもりで使われた言葉の誤用と考えられる。⁷ 彼の意図は父親をからかい混乱させることであるが、ここで‘confusions’を使ったことで彼が意図しなかった面白さが生じている。傍白によって、彼は道徳劇の Vice に似た観客との近い関

係を維持しながら、観客とともに父親のからかいや狼狽ぶりを楽しむ。他人を装って自分のことを ‘young Master Launcelot’ と何度も言ったり、さほど教養のない彼が田舎者の父親に聞きかじりのラテン語 ‘ergo’ (=therefore) をこれ見よがしに使うときも、観客にとって非常に滑稽である。彼はこれまで Shylock のもとで召使いとしてつらい思いをしてきたようで、父親が主人に手土産を持ってきたと言うと彼は次のように反対する。

my master’s a very Jew, —give him a present? give him a halter! —I am famish’d in his service. You may tell every finger I have with my ribs:
(100-3)

手土産を Shylock に渡すくらいなら、絞首用の綱をやった方がまだ。今ではずいぶんやせてしまって、あばら骨が数えられるほどになったと嘆く。ここでも彼は滑稽な間違いをしていて、本人としては「おれのあばら骨を指で数えることができる」と言うつもりだったはずであるが、実際には「おれのあばら骨で指を全て数えることができる」という奇妙な表現になっている。彼は直ちに新しい主人として Bassanio に仕える考えを父親に告げる。

滑稽さの点では彼の父親にも見るべきものが少しある。Bassanio が登場すると (2.2.109ff) 親子は彼に話しかけるが、滑稽な言葉の誤用を犯したり⁸ 無駄口が多くてなかなか要領を得ず、短いながら愉快な場面になっている。Launcelot は ‘the short and the long is’ とか ‘To be brief’ という表現を多用するが、彼が実際にしていることはその逆で、簡潔どころか問題の核心に触れようとしない。しびれを切らした Bassanio が一人が話すように言うと、話しは一気に前進し、Launcelot が従者として仕えることが認められる。彼は退場直前に自分の手相を見ながら次のように語る。

Father in, —I cannot get a service, no! I have ne’er a tongue in my head: well, if any man in Italy have a fairer table which doth offer to swear upon a book, I shall have good fortune; go to, here’s a simple line of life, here’s a small trifle of wives, —alas! fifteen wives is nothing, alevn widows and nine maids is a simple coming-in for one man, and then to scape drowning thrice, and to be in peril of my life with the edge of a

feather-bed, here are simple scapes: well, if Fortune be a woman she's a good wench for this gear: father come, I'll take my leave of the Jew in the twinkling. (2.2.149-60)

彼が父親をどの程度意識して話しているのか、また、彼の本音がどの程度なのか分かりにくいだが、ここには彼らしさが良く現われている。全体的に彼はかなりおどけていて、現実とは逆のことを反語的に語ったり、自分の手相を見ながら有りもしない絵空事（例えば、自分の女運に触れて、女房がたったの15人、後家が11人に生娘が9人というのは、男一人の取り分としてはお粗末だと嘆く）や災難などをおもしろおかしく話している。作り話はあまりにも現実離れた馬鹿馬鹿しいものであり、観客を意識しながら一つのほら話として彼自身が楽しんでいる。

2幕3場の Jessica との対話においても、Launcelot らしさが発揮されている。文体の点では Jessica がブランク・ヴァースを、彼が散文を話すことでコントラストをなして、ここでも彼の言葉の誤用は健在である。彼女との別れを惜しんで“tears exhibit my tongue”と言うとき、本人としては「涙のせいで言葉が話せない」と言いたいのであるが、彼は‘exhibit’を‘inhibit’のつもりで用いている。また、Jessica は間違いなくキリスト教徒の不倫による子供であると、大胆なことを言って彼女をいじめるが、彼女自身は Launcelot が悪意のない単純でかわいい召使いであることをよく知っている。2幕5場で Bassanio の指示により彼が Shylock を呼びに来るとき、彼はもはや Shylock に気兼ねする必要のない立場にあるので、彼は自分の娘や財産に気をもむ Shylock を大胆にからかう。この後、彼はしばらく登場しない。

3幕5場では場所がベルモントの Portia 邸の庭になっていて、Launcelot と Jessica は散文で対話する。話題は父親の罪（浮気）とそれによる子供の不幸で、彼の考え（agitation）では彼女は呪われていることになる。彼は‘agitation’（動揺）を‘cogitation’（思考、考え）のつもりで使っていて、これも難しいことを言おうとしたことによる言葉の誤用であるが、相手を少し動揺させる意図があるので彼が予期しなかった面白い効果が得られている。Jessica にただ一つ救いがあるとすれば、それは一種の‘bastard hope’（不純な、私生児の希望）で、彼女はユダヤ人の娘ではないかもしれないとほのめかす。そうなると、今度は母親の不倫が彼女に及ぶわけで、父と母の両方が原因で呪われている可能

性が生じる。結局のところ、彼女は二つの理由で地獄落ちになる。それに対して Jessica が夫のおかげでキリスト教に改宗したと言うと、そんなことがたびたび起きると皆が ‘pork-eaters’ になり、まもなく焼き豚の一切れさえ金で買えなくなると切り返す。そこへ Lorenzo がやってきて、道化の不始末（ムーア人の娘をはらませたこと）を非難すると、彼は Lorenzo に次のように返答する。

It is much that the Moor should be more than reason: but if she be less than an honest woman, she is indeed more than I took her for. (3.5.37-39)

道化が意味していることは、もしそのムーア人がふつうより腹が大きければ (more than reason)、それはえらいこと (much) であり、もし彼女が貞淑な女よりも以下 (less) であれば、彼女は自分が思っていたよりも上手だ (more than I took her for) ということである。道化はここで ‘much’, ‘more’, ‘less’ に複数の意味をこめて巧みに使いこなし、見事で技巧的な返答をしている。Lorenzo は道化の洒落に感心させられ、“what a wit-snapper are you!” (君は何という駄洒落屋なのだ) と叫ぶほかない。彼は道化に夕食の準備を急ぐように言うと、それはすでにできていて ‘cover’ (テーブルにクロスを敷いて整える) という合い言葉で十分だと答える。相手が “Will you cover then sir?” と言えば、道化は待ってましたとばかり ‘cover’ をわざと「帽子をかぶる」という別な意味で理解し、主人の前で帽子をかぶることなどとてもできないと意表をつく返事をする。Lorenzo が揚げ足取りはもうやめて素直に理解するよう頼むと、道化はようやく立ち去る。その後ろ姿を見ながら Lorenzo はブランク・ヴァースで次のように言う。

O dear discretion, how his words are suited!
The fool hath planted in his memory
An army of good words,... (3.5.59-61)

これは道化に対する褒め言葉で、彼の使う言葉は実に適切であり、頭の中にはたくさんのすばらしい言葉がしまい込まれているという。このあたりの Launcelot は賢明な道化に見られる言葉遊びや当意即妙の返答を見せている。前半は教養に欠け、頭の回転がもう一つで、言葉の滑稽な誤用をしばしば犯す

粗野で滑稽な田舎者という感じであったが、後半ではその特徴をある程度残しているものの、Lorenzo や Jessica たちをやりこめるほど機知と鋭さを獲得し利口な道化に近づいたという印象を与える。Bente A. Videvæk は Launcelot について、「彼の全ての機能は Shylock の家を去ると大きく変わり、彼の言語さえ変化して言葉の誤用を閉め出し、凝った洒落を加え、いたずらに対する傾向が消える。また、劇の後半では独白で観客に語りかけることもない。クラウンであることをやめないが、その定義が途中で変化する」と述べている。⁹ これは彼の特徴をほぼ的確に捉えた面白い見解である。

その後、彼が再び登場するのは5幕1場で、彼の主人が朝までに Portia 邸に戻ることを従者として知らせに来る。飛脚のまねをして“Sola, sola! wo ha, ho! sola, sola!”と大きな声で滑稽に叫ぶ以外、ほとんど活躍することなく退場し、2度と姿を見せることはない。5幕は Portia 邸を舞台として、Lorenzo と Jessica の愛をテーマとした、かなり詩的で叙情的な、時にコミカルな対話が始まる。調和の象徴である音楽が奏される中、悪意の化身 Shylock から Antonio を救うという困難な仕事を成し遂げた Portia たちと、何も知らずに戻ってきた Bassanio たちの指輪を巡る滑稽な口論が続き、その後真実の暴露、そして和解による喜劇的な結末へと進展するが、その展開に置いて脇役の道化が活躍する場面はあまりない。ただ残念なのは、面白い道化を創造しながら、この劇において活躍の場を十分与えていない事である。

さて、Launcelot の言葉について結論を述べなければならない。彼は主人の変更を境に言葉と行動において変化を見せるが、彼の役割は終始喜劇的人物としての道化である。彼は常に散文で語り、前半では観客を意識した滑稽な独白、言葉の誤用、いたずら、単純な思考や言葉の繰り返し、でたらめな作り話などが目立ち、後半では言葉の誤用やこれまでの特徴が減少し、その代わりに機知に富んだ洒落や言葉遊び、相手の意表を突く当意即妙の答えやうまい切り返しなどが目立つようになる。彼の元の名前が Launcelot Jobbe であり、それは「好色漢」と「大食漢」の両方を意味し、彼と戯れる者を突くということを暗示することはすでに触れた。彼と悪徳との関連は好色や大食の点で明らかで、好色についてはムーア人の女をはらませたというエピソードで、大食については、ユダヤ人の高利貸しで自分の娘よりも財産を大切に思う Shylock が言う点で全面的に信じることはできないが、彼に「大飯くらい」(gormandize, 2.5.3)と非難されている事でもある程度確かである。彼と戯れる者は誰であれ突くと

いう点では、劇の後半の Jessica との対話で彼女が私生児かもしれないとか、彼女の改宗でキリスト教徒がさらに増えると豚肉の高騰を招くとかからかったり、Lorenzo 相手に夕食の準備のことで機知に富む洒落や揚げ足取りで相手を困らせる時、彼は道化として見事に相手を突き、やりこめている。Launcelot は後半では ‘jester’（お抱え道化師）への途上にあると考える事ができるが、後の Touchstone や Feste などの賢明な宮廷道化に比べると、言語能力や資質の点で比較にならない。しかし、彼は愚かさを多分に持った愉快的な道化として独特の言葉話し、喜劇的人物、笑いの提供者として面白さと滑稽さを豊かに持っているといえる。

II

次に *The Winter's Tale* に登場する道化（劇では Clown として登場）の言葉について見ることにする。彼は羊飼いの息子として、ボヘミアの牧歌的な自然環境の中で、父親とともに素朴な生活を送っている。彼が初めて登場するのは 3 幕 5 場で、シシリア王の命令により Antigonus が王の娘をボヘミアの無人の地に捨て、熊に襲われながら退場した後である。そのタイミングは悲劇的なものから喜劇的なものへと切り替わる、まさに転換点にあたる。父親の羊飼いが先にその赤子を見つけ、そこへクラウンがやって来て目撃したばかりのすさまじい嵐と悲惨な出来事について語る。

I have seen two such sights, by sea and by land! But I am not to say it
is a sea, for it is now the sky: betwixt the firmament and it you cannot
thrust a bodkin's point. (3.3.83-86)¹⁰

クラウンは嵐のために海と空が接するばかりの激しさを散文で描写し、両者の間に千枚通しの先端さえ差し込むことができない程だと言っている。彼なりに誇張して表現したつもりかもしれないが、表現力の乏しさゆえに猛烈な嵐の恐ろしさはリアルに伝わらない。当時、‘say’ と ‘sea’ が同じように発音されていたとすると、¹¹ 彼はここで洒落を言っていることになり、それによって、Brian Vickers 的な言い方をすると、状況の潜在的な深刻さがほかされることになる。¹² 父親がさらに尋ねると、彼は海と陸での二つの悲惨な出来事について次

のように述べる。

O, the most piteous cry of the poor souls! sometimes to see 'em, and not to see 'em: now the ship boring the moon with her main-mast, and anon swallowed with yest and froth, as you 'd thrust a cork into a hogs-head. And then for the land-service, to see how the bear tore out his shoulder-bone, how he cried to me for help... But to make an end of the ship, to see how the sea flap-dragoned it: (90-98)

ここでは幾つかのイメージが特徴的で、「舟がメインマストで月に穴を開ける」とか「大樽にコルクを差し込むように、泡を付けて一気に飲み込む」など、また‘land-service’という軍隊の言葉を使って熊が人間にどのように襲いかかったか、悲惨さや残酷さを避けるようなイメージや表現を用いて説明している。舟が海中に飲み込まれたことを‘flap-dragoned’という言葉で表現することで、燃えているブランデーから干しぶどうを取り出し、それを口に入れて食べるというクリスマスのゲームが暗示され、¹³ 悲惨な海難事故がクラウンによって淡々と説明され、まるでそれが自分とはあまり関わりのない出来事として距離を置いて捉えているような印象を与える。父親に何時のことだと聞かれると、彼は“Now, now: I have not winked since I saw these sights: the men are not yet cold under water, nor the bear half dined on the gentleman:”と答える。Brian Vickersは‘dine’について、それは大変上品ぶった言葉で、あたかも熊がテーブルについて行儀よく食べていることを暗示すると述べている。¹⁴ 確かに、Marjorie Garberが述べるように、‘dined’という言葉の優雅さは我々の「遠ざける感覚」¹⁵に貢献しているといえる。悲惨で残酷な光景の色調を和らげてユーモラスに語るというのは、クラウンの役割が滑稽な言動によって観客に笑いと楽しみを提供する事であるので、クラウンらしいといえる。深刻さをそのまま受け止めない一種の鈍感さは、クラウンの弱点であると同時に強みとたくましさでもある。上で彼が見せたユーモラスな描写は、どこまでが本人の意図的なものなのか言い難い。すぐ後で父親が「自分がそばにいてその老人を助けられたらよかったのに」と言うと、彼は“there your charity would have lacked footing.”と言って‘lacked footing’に「救助の機会はない」「舟が揺れて足場が弱い」という2つの意味を掛けて洒落を言うが、これにしてもやや難しい洒落なので、

本人の意図的なものかどうか断定しにくい。彼らは偶然見つけた幸運（赤子と金貨）を二人だけの秘密にして、急いで帰途につく。

次にクラウンが登場するのは4幕3場で、すでに16年が経過しており、Perditaは王子のFlorizelが熱愛するほど美しい成熟した女性になっている。村では羊毛刈り祭の準備が進められ、クラウンはスパイスの買い出しに出かけるが、運悪く詐欺師でこそ泥のAutolycusに目を付けられ、相手をするうちに財布をすられる。それに全く気づかないクラウンは哀れな姿の相手に金を少し渡そうとするが、相手は必死にそれを辞退する。この間、クラウンの言葉は単純で素直さを感じさせるもので、悪賢く口達者なAutolycusの言葉遣いとは対照的である。観客にとってこの場面は、クラウンの愚かさとスリが財布を抜き取る時の巧妙な技が笑いとスリルを引き起こす楽しいものになっている。

クラウンが次に登場する時、羊飼いの小屋を舞台に祭りは始まっている。羊飼いたちのにぎやかな踊りの後、召使いが並はずれたバラッドの歌い手がやって来たことをやや卑猥で調子のよい散文で伝え、クラウンは次のように言う。

He could never come better: he shall come in. I love a ballad but even too well, if it be doleful matter merrily set down; or a very pleasant thing indeed, and sung lamentably. (4.4.189-92)

ここで面白いのは、クラウンの好きなバラッドは「悲しい内容が陽気に書かれているものか、非常に楽しい内容で悲しげに歌うもの」だという表現である。悲しい内容のバラッドは悲しげに歌うのがふつうであるが、あえて内容と歌い方が矛盾するバラッドがクラウンの好みの方である。ここで彼は瞬間的に機知を働かせて面白い言い方をしたが、この程度の冴えは彼にとって可能であると考えられる。道化と情欲の結びつきは珍しいことではなく、このクラウンは田舎娘のMopsaに恋をしている。彼女へのプレゼントの約束を含め、娘たちが色恋ざたをおおびらに話すのを聞いて彼はたしなめるが、これは彼なりの分別の表現である。しかし、話題が最近のバラッドに及ぶと、その内容がいかにも馬鹿げているAutolycusの滑稽な説明により、娘たちだけでなくクラウンさえも信じているように見える。

次の4幕4場では、王子とPerditaの強引な結婚のために、クラウンは父親

とともに Polixenes 王の激怒を買い意気消沈している。恐ろしい極刑から逃れるためには、彼らが Perdita と何ら血のつながりがないこと、長い間秘密にしてきた過去の出来事を王に告白すべきだと彼は提案する。

She being none of your flesh and blood, your flesh and blood has not offended the king; and so your flesh and blood is not to be punished by him. Show those things you found about her (those secret things, all but what she has with her): this being done, let the law go whistle: (4.4.693-98)

ここでクラウンは三段論法を用いて、彼女が実の娘でない以上、王に対して罪を犯したことなく、従って父親は自分とともに王から厳罰を受ける理由がないと主張する。上で ‘your flesh and blood’ を3回繰り返し、本人としては強調しているつもりかもしれないが、観客には同じ表現の繰り返し彼の単純な思考を印象づけて滑稽に聞こえる。また、‘what she has with her’ が彼女の陰部を意味しているとすれば、¹⁶ 触れなくてもよいことにあえて遠回しに言及することでおかしみと笑いが生じる。上の台詞では三段論法、言葉の繰り返しと婉曲語法、細かいことへのこだわりなどが特徴になっている。親子の対話は、その直前に王子と衣服の交換を要求され、立派な宮廷人の姿になった Autolycus に立ち聞きされている。Autolycus は、身分の低い者を軽蔑するような、宮廷人をまねた威圧的な態度と言葉で話しかける。ここでの3人による対話は非常に滑稽で、この劇において最も愉快な場面の一つになっている。極刑におびえる羊飼いか親子に事情を知らぬふりをし、宮廷人になりすまして持ち前の機知と言語能力で恐ろしい極刑を非常にリアルに語り、二人の恐怖心をあおる。彼もまた劇の喜劇的な雰囲気創造する点で大いに貢献している。彼は相手を圧倒するため故意に難しい言葉や表現（例えば、‘aqua-vitæ’, ‘infusion’, ‘prognostication’ など）を多用し、宮廷人風の文体を用い続けるのに対し、クラウンはほとんど常に単純で素朴な言葉を用いる。この危機を逃れるためには、Autolycus に王への取り次ぎを願うしかないと言っている。

He seems to be of great authority: close with him, give him gold; and though authority be a stubborn bear, yet he is oft led by the nose with

gold: show the inside of your purse to the outside of his hand, and no more ado. Remember ‘stoned’, and ‘flayed alive’! (802-7)

彼はお金に大きな力があり、権威は頑固な熊であるが、お金を渡せば鼻面をつかんで引き回すことができる事を知っている。財布の中身をすべて相手の手のひらに置くという表現にも、‘the inside of your purse’ と ‘the outside of his hand’ のコントラストがあり、全体的にユーモラスな表現になっている。ただ、彼にユーモアのセンスがあるにしても、Autolycus からこの件の当事者なのかと聞かれ、次のように洒落をまじえて答えるとき、それがクラウンの意図的なものかどうか明確でない。

In some sort, sir: but though my case be a pitiful one, I hope I shall not be flayed out of it. (816-17)

ここで ‘case’ は「訴訟」と「皮膚」、‘be flayed out of it’ は「訴訟に負ける」と「皮膚をはぎ取られる」¹⁷ という意味があり、やや難しい洒落になっている。Brian Vickers は「無意識の洒落」(unconscious pun) について幾つか言及しているが、¹⁸ このクラウンが洒落を言う時、彼の言語能力を考えると、その多くが無意識に発せられ、本人は恐らくそれに気づいていないと考えてよいように思われる。

5幕2場でクラウンたちは人生で最高の瞬間を迎える。先ず、紳士たちにより「昔話のような」(like an old tale, 5.2.28) 信じがたい出来事が宮廷風の散文で語られ、王と娘の劇的な再会、王たちの深い感動と沈黙などが伝えられる。羊飼いの親子は Perdita の命の恩人として歓迎され、紳士の身分に出世して意気揚々と現われる。今や立場が逆転したクラウンは Autolycus を見て次のように言う。

You are well met, sir. You denied to fight with me this other day, because I was no gentleman born. See you these clothes? say you see them not and think me still no gentleman born: you were best say these robes are not gentleman born: give me the lie; do; and try whether I am not now a gentleman born. (5.2.129-35)

相手の立派な姿を見て Autolycus は、“I know you are now, sir, a gentleman born.” と答えるしかない。ここでクラウンは否定表現とともに「生まれながらの紳士」(gentleman born) と言う表現を得意げに4回も繰り返し、後でも何度か繰り返すとともに、初めて「紳士らしい涙」(gentleman-like tears) を流したと言うのを見ても、少し前に起きた夢のような出来事を子供のように純粋に心から喜んでいるのが分かる。極刑におびえていたクラウンが恐怖心から完全に解放され、Autolycus に‘your good worship’ という敬称さえ使わせる立派な身分になった。実際には彼の身分と外見が変わっただけで中身は変わっていないが、¹⁹ 地に足がつかない喜びようは滑稽ではほえましい。この後2人は王たち一部の者による王妃の奇跡的な復活の目撃と家族の再会という感動的な場面に参加できないが、最高の形で劇を終えることになる。

この辺で当面の道化(=クラウン)の言葉についてまとめてみたい。彼は脇役として登場し個性において豊かではないので、個人というより類型として分類される。彼は Autolycus のように機知と悪知恵に富む人物ではなく、素朴で人のよい田舎者である。彼は喜劇的人物として滑稽な言動により笑いを提供するが、その他に父親とともにシシリア王の娘を救い育て、最終的には王と娘の劇的な再会につなげるという非常に重要な役割を与えられている。J. H. P. Pafford は羊飼いの親子の言語について、両者の間で一貫して適切な区別があり、羊飼いの台詞には息子の台詞以上に年齢と責任を感じさせるものがあると述べているが、²⁰ それは当然といえる。クラウンは常に散文を話し、彼が用いる言葉はボヘミアの田舎者にふさわしい平易で素朴なものが中心で、難しい言葉はほとんど知らず、まれにそれを使うと滑稽な言葉の誤用を犯す。彼がときたま見せるユーモアについて、彼自身ほとんど気づいていないように思われる。²¹ 彼は時々洒落を言うが、上で述べたように、彼の機知や知的レベルを考えると、鋭敏な職業道化のように意図的に言うというよりも、その多くは本人が気づかないまま作者の技によって言わされているように思われる。しかし、観客にとって彼の洒落が意図的か否かということはどうでもよく、洒落によって笑いが生じ、その場の喜劇的な雰囲気が高まればそれで十分である。彼は単純で人を疑うことがなく、人間的で善意豊かな小心者で、そのため Autolycus のような悪知恵の働く詐欺師には格好のかもになるが、子供のような純粋さや単純さは彼の滑稽で愚かしい行動とともに魅力の一つになっていて、これら全てが彼の話

す言葉に表われているといえる。

* * *

本論では、主に愚かで滑稽な言動によって観客の笑いを誘う二人の道化に焦点を絞り、彼らの言葉の特徴について考察してみた。彼らはそれぞれの劇において異なる役割や特徴を持って互いに相違点を見せているが、彼らが話す言葉を見ると幾つか共通点があるように思われる。文体の点では、主人公たちがブランク・ヴァースを話すときでも、彼らは教養のない田舎者かつ喜劇的な人物として常に散文を話す。また、彼らはたいてい単純で素朴な言葉を用い、時たま背伸びをして難しい言葉を話そうとすると、教養が付いていかず滑稽な言葉の誤用をやらかす。彼らにも彼らなりのユーモアがあり時々洒落を言うが、笑いを取るために意図的に洒落を言うことはあまり多くない。主人公たちと比べて機知や言語能力において劣っているので、やや矛盾する言い方になるが、彼らの言う洒落の多くは無意識的なもので、本人は恐らく気づかずに見事な洒落を言っているように思われる。一方、あまりにも見え透いた作り話や同じ言葉の繰り返し、誇張法などの修辭的的技巧は、笑いやおかしみを生み出すために効果的である。些事へのこだわり、情欲に駆られた行動、さりげない性的アリュージョン、臆病でありながら時に見せる大胆な発言なども、社会の下層に位置する笑いの対象であり提供者である道化の言葉の特徴と考えるとよい。個人差はあるにしても、以上のことが二人の道化の言葉における特徴として指摘できるように思われる。

注

1 拙論「道化の言葉—*Twelfth Night* の Feste の場合—」鳥根大学法文学部紀要『鳥大言語文化』第26号、2009参照

2 John Russell Brown (ed.), *The Arden Shakespeare: The Merchant of Venice*, Methuen & Co Ltd, 1964, p. xxvii.

3 David Wiles, *Shakespeare's Clown*, Cambridge University Press, 1987, p. 8.

4 Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose*, Methuen, 1968, p.76.

5 この 'incarnation' は 'incarnate' の言い間違いである。

6 *The Arden Shakespeare: The Merchant of Venice*, op. cit. 以後、作品の引用はこの版

による。

7 Sanki Ichikawa and Takuji Mine (ed.), *The Kenkyusha Shakespeare: The Merchant of Venice*, Kenkyusha, 1964, pp. 140-41.

8 Gobboはこの場面で‘infection’を‘affection’のつもりで用いたり、Launcelotは‘frutify’を‘notify’のつもりで用いている。

9 Bente A. Videvæk, *The Stage Clown in Shakespeare's Theatre*, Greenwood Press, 1996, p. 67.

10 J. H. P. Pafford (ed.), *The Arden Shakespeare: The Winter's Tale*, Methuen & Co Ltd, 1963. 以後、作品の引用はこのテキストによる。

11 Sanki Ichikawa and Takuji Mine (ed.), *The Kenkyusha Shakespeare: The Winter's Tale*, Kenkyusha, 1967, p. 197.

12 Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose*, op. cit., p.417.

13 *The Arden Shakespeare: The Winter's Tale*, op. cit., pp.71-72.

14 Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose*, op. cit., p.420.

15 Marjorie Garber, *Shakespeare After All*, Anchor Books, New York, 2005, p. 839.

16 *The Kenkyusha Shakespeare: The Winter's Tale*, op. cit., p.234.

17 *The Kenkyusha Shakespeare: The Winter's Tale*, *ibid.*, p.239.

18 Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose*, op. cit., p.418.

19 クラウンはこの場面で‘prosperous’（成功した、順調な）のつもりで‘preposterous’（人の意に逆らう、ひねくれた）と言って、滑稽な言葉の誤用をしている。少し難しいことを言おうとするとこの種の間違いを犯す。また、4幕4場で羊飼いたちが王に会いに行こうとしているとき、Autolycusにどんな‘advocate’（弁護士）を持っているか聞かれると、クラウンは「それはキジを指す宮廷語だよ」と父親に説明している。ワイロを裁判官に渡すのが習慣であることは知っているようであるが、‘advocate’の本当の意味を知っているか疑問である。

20 *The Arden Shakespeare: The Winter's Tale*, op. cit., p.lxxviii.

21 Cf. Loreto Todd, *York Notes on The Winter's Tale*, Longman York Press, 1980, p.83.